

イスラエルの状況緊急レポート 2021.05.16 に登場する言葉の Point

時系列を簡単におさらい

背景：

- ① 4月12日から1月間＝ラマダン
- ② 5月22日＝パレスチナ自治区総選挙（無期限延期）
- ③ 2019年から続く混沌としたイスラエル政界

- ・ラマダン前：イスラエル警察がダマスカス門の広場を閉鎖
- ・アラブ人が反発→ 超正統派ユダヤ人に暴行、TikTokでバズる
- ・東エルサレムの土地所有権・立ち退き問題→極右議員が事務所開設し扇動
- ・エルサレムの日：ユダヤ人の神殿の丘への入場問題
- ・5月10日、ハマスが発射したロケット弾が、エルサレムに着弾
- ・同日、イスラエルは「壁の保護者作戦」を開始
- ・イスラエル国内：ユダヤ人に対するアラブ人のリンチ
ユダヤ人も報復としてアラブ人をリンチ

▶ラマダン（ラマダーン）

2021年は4月12日(月)夕方～5月12日(水)夕方ヒジュラ暦（イスラム暦）で9月を意味するラマダーンに、コーランが預言者ムハンマドに啓示され、イスラム教徒にとって、ラマダンは「聖なる月」となった。この月において、ムスリムは日の出から日没にかけて、一切の飲食を断つことにより、空腹や自己犠牲を経験し、飢えた人や平等への共感を育むことを重視する。また親族や友人らと共に苦しい体験を分かち合うこと

で、ムスリム同士の連帯感は強まり、多くの寄付（ザカート）や施し（イフタール）が行われる。断食中は、飲食を断つだけでなく、喧嘩や悪口や闘争などの忌避されるべきことや、喫煙や性交渉などの欲も断つことにより、自身を清めてイスラム教の信仰心を強める。ラマダーン明けの祭りは「イド・アル＝フィトル」と呼ばれ、盛大なものである。

▶パレスチナ自治区(正式名:パレスチナ暫定自治政府) 2021年5月現在のデータ

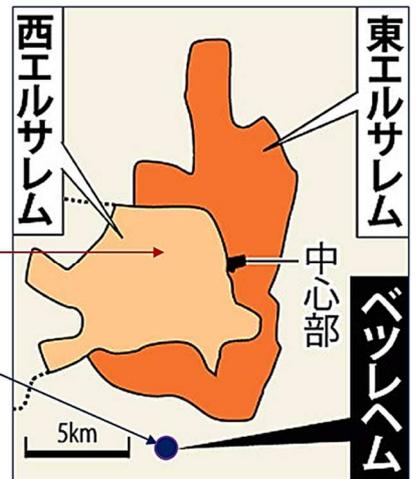
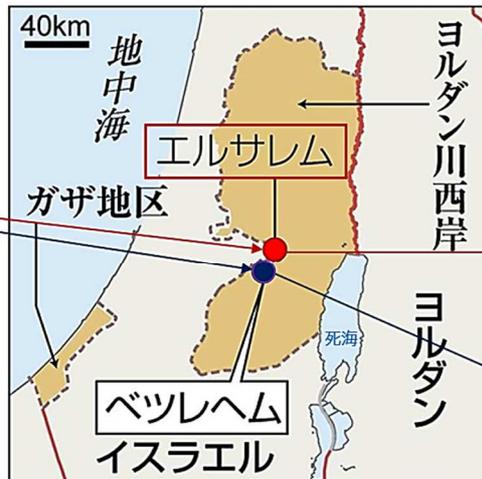
ヨルダンに接するヨルダン川西岸地区(ウェストバンク)とエジプトに接するガザ地区及び東エルサレムからなるパレスチナ人の自治地区。行政は、パレスチナ解放機構(PLO)が母体となって設立されたパレスチナ自治政府が行う。ただし、最終的な地位は将来イスラエルとパレスチナとの間で結ばれる包括的和平によって定められることになっており、目下の正式な地位は暫定自治区・暫定自治政府となっている。



- ・全世界のパレスチナ人口：1,034万人（2007年末、パレスチナ中央統計局）
- 西岸・ガザ地区の人口：西岸地区234万人（このうち難民75万人）、ガザ地区142万人（このうち難民105万人）
- 西岸・ガザ地区以外の人口：658万人（このうち難民281万人：ヨルダン193万人、シリア46万人、レバノン42万人）→ $234 \text{万人} \div 1,034 \text{万人} \times 100 \approx 22.6\%$ ：全世界のパレスチナ人の内、約20%
- ・宗教：イスラム教徒92%、キリスト教徒7%、その他1%
- ・指導者：大統領：マフムード・アッバース（PLO議長を兼任）、首相：サラーム・ファイヤード

参考：ウィキペディア「ラマダン」、外務省 他

ナザレ / エルサレム / ベツレヘム



(図A)

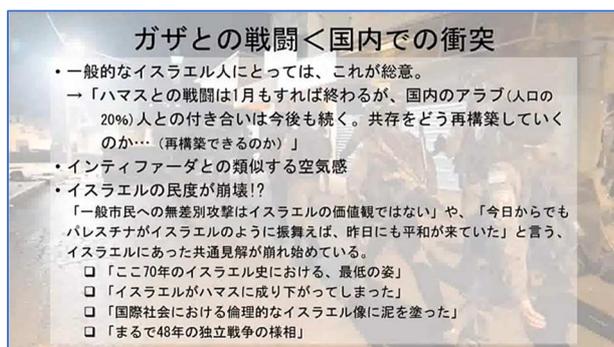
(図B)

※ナザレ/エルサレム(イスラエル)/ベツレヘム(パレスチナ自治区)

出典(図のみ)：産経ニュース/ (図A) 毎日新聞 (図B) →上記図は一部加工しています。

▶エルサレムの日

ユダヤ人がエルサレムの再統合を祝う日を言う。しかし、エルサレムは今もなお上図のように東西に分裂されたままです。エルサレムの日を祝っているユダヤ人は、ユダヤ人だけが住むエルサレムが「統合」されたエルサレムであり、旧約聖書の時代にユダヤ人のものだったエルサレムを、現在自分たちの力で再び完全に掌握することができた、ということを信じています。この日は、エルサレムに住むユダヤ人以外の人たちをエルサレムから追い出すことを祝う、危険な日です。



▶インティファダ

アラビア語で「振り落とす」という意味の概念で、「蜂起」・「反乱」の意で使用される。アラブ世界でインティファダと呼ばれるものは複数あるが、日本においては通常パレスチナで発生したものを意味する。

パレスチナのインティファダは、「イスラエルによるパレスチナの軍事占領に対する民衆蜂起（抵抗活動）」に対する呼称として一般的に使用される。

イスラエル強硬派からは「国際社会を反イスラエルに向けようとするテロ作戦の一環」とみなされ、「蜂起を名目とした不均衡な戦争（非対称戦争）」として主張されることもある。イスラエルの一部では、インティファダとそれに対する弾圧等を通じて「強硬な対パレスチナ占領政策」の誤りに気付き、良心的兵役拒否や和平支持等の運動が広がる契機となった。

2020 年末までに、パレスチナのインティファダは 2 度発生している。

(1) 第 1 次インティファダ：1987 年に発生。同年 12 月 9 日にガザ地区においてイスラエル人のトラックとパレスチナ人のバンが衝突事故を起こし、4 人の死亡者を出したことがきっかけであった。暴力行為は 1991 年頃に下火となり、1993 年 8 月のオスロ合意およびパレスチナ自治政府の設立に伴い沈静化した。

(2) 第 2 次インティファダ：2000 年に発生。同年 9 月 28 日にイスラエルのシャロン・リカード党首・外相（後に首相）が 1,000 名の武装した側近と共にアル・アクサモスクに入場したのがきっかけであった。暴力行為はヤーセル・アラファートが死去した 2004 年 11 月頃から下火となり、一般的には 2005 年中に沈静化したと見られている。

2000 年代半ば以降、パレスチナでインティファダと称される活動は発生していない。2017 年 12 月 6 日にはトランプ・アメリカ大統領がパレスチナ側の主張に反するエルサレムのイスラエル首都宣言を発表したものの、一般パレスチナ人の中から大規模かつ長期に展開しそうな抗議運動は見られなかった。この背景にはパレスチナ自治政府に対する不信感やイスラエル経済への依存の高まりがあり、テルアビブ大学安全保障問題研究所のコピ・ミハイル上席研究員は「パレスチナは過去 2 回のインティファダで大きな代償を払ったにもかかわらず、何も得るものがなかった。自治政府に対する不満は強く、自らの生活を投げ出してまで蜂起しようという人は少ないはずだ」と指摘している。

翌 2018 年 3 月 2 日には、ガザ地区を支配するイスラム原理主義組織ハマスが「アメリカがエルサレムをイスラエルの首都と認めたりすれば、『インティファダ』と呼ばれる民衆蜂起をパレスチナの人たちに呼びかける」と警告したが、最終的には『インティファダ』と呼ばれるような出来事は起きなかった。

出典：ウィキペディア「インティファダ」

【参考】 [ファウダ:報復の連鎖](#)